The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生涯ケアラーと生涯家計支持者の誕生 ： 世代関係の再構築とジェンダー
Author(s)	大和, 礼子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49453
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【18】

氏　　名	大和　礼子（やまと　れいこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　２２３６１　号
学位授与年月日	平成20年５月１日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	**生涯ケアラーと生涯家計支持者の誕生－世代関係の再構築とジェンダー－**
論文審査委員	（主査） 教　授　川端　　亮 （副査） 教　授　堤　　修三　　教　授　牟田　和恵

論文内容の要旨

日本においては従来、高齢者の介護は家庭においてその子どもたちがするのが当たり前と考えられてきた。この背後には「公共領域＝自立、家内領域＝（家族への）依存」というイデオロギーがある。しかし1980年代以降、専門家による介護サービスを利用したいと考える人が、特に女性において目だって増えてきた。このことに対する通常の解釈は「介護の負担が大きくなったので、介護する立場にある女性が、専門家による介護を望むようになった」というものである。本研究ではまず、この「通常の解釈」がもっている暗黙の前提を明らかにし、その妥当性について検討した。そしてそれに替わる新たな枠組みを提示し、その枠組みのもとで、戦後日本における高齢者と成人子の世代関係がどのように変化してきたかを論じた。さらに「専門家による介護サービスを利用したい」という意識の、特に女性における高まりは、「公共領域＝自立、家内領域＝依存」という従来のイデオロギーを否定するオルタナティブな意識といえるのかについて考察し、これをもとに今後求められる公共領域／家内領域のあり方について論じた。本研究で論じたことは以下のとおりである。

「通常の解釈」がもっている暗黙の前提とは、第１に女性を「介護する存在」ととらえていることである。この前提からおのずと導かれる解釈として「通常の解釈」は、「専門家による介護を選好する人は、女性により多い」という事実の背後には、「家族を介護することを避けたい」（家族に対して利己的）という女性の意識があると見なす。しかし調査データによって、介護する立場としての意識と介護される立場としての意識を比較すると、「専門家による介護を選好する人は、女性により多い」という調査結果は、介護される立場の意識つまり「自分の介護」において見られるのであ

り、介護する立場の意識つまり「親や配偶者の介護」においては、男女で意識の差はほとんどなかった。このことから、「専門家による介護を選好する人が増加し、そのような人は女性により多い」という変化の背後にあるのは、「家族に介護されることを避けたい女性」（家族に対して利他的な女性）であることがわかった。

介護に対する女性のこのような態度を背後で規定しているのは、「家族をケアする人（＝ケアラー）」としてのアイデンティティである。しかしながらかつての家制度においては、高齢者の介護は嫁の役割とされていた。つまり嫁は「準制度化された介護者」であった。したがって女性は、壮年期までは家族のケアラーであっても、高齢期になると（少なくとも嫁に対しては）ケアラーであることをやめ、自分の介護を嫁に頼ることを当然のこととして期待できた。それでは女性はいつ頃どうして、自分の介護を嫁に頼れないと考えるようになったのか。この問いに答えるためには、「通常の解釈」における第２の暗黙の前提を再検討する必要がある。

第２の暗黙の前提とは、介護における変化を、経済的扶養における変化と切り離し、介護において独立に起こったこととしてとらえることである。しかし現実の生活では、介護面での世代関係と経済面での世代関係は強く結びついている。本研究では、介護をめぐる世代関係に影響を与えたのは経済的扶養における世代関係の変化であることを論じた。公的年金の成熟によって、扶養をめぐる世代関係は、「老後は息子の扶養に頼る」という家モデルにそったものから、「公的年金に頼る」という夫婦家族モデルにそったものへと再構築された。公的年金の成熟は、男性を「（息子の扶養に頼らない）生涯家計支持者」にしたのである。経済面におけるこのような変化は介護面にも影響を及ぼし、介護面においても人々は家モデルではなく夫婦家族モデルによって世代関係をとらえるようになった。つまり扶養は息子に頼らないのに、介護だけを嫁（息子の妻）に頼るということはしにくくなったのである。その結果、男性においては妻が「準制度化された介護者」として残った。一方、女性は「準制度化された介護者」を失ったが、ケアラーとしてのアイデンティティは容易に変わらなかった。その結果女性は、「家族に迷惑をかけたくない」という「生涯ケアラー」としての意識をもつようになり、自分の介護は専門家に頼ると考える人が増えていったのである。

さらにインタビュー調査の結果から、老後の世代関係について「生涯ケアラー」「生涯家計支持者」「公的支援忌避者」「看取り合う夫婦」という４つのイメージを抽出した。「生涯ケアラー」は、家族に迷惑をかけないよう、自分の介護を「配偶者にも子どもにも頼らず、専門家に頼りたい」、そうすることによってケアラーとしての役割を生涯にわたって維持したいと考える人々である。これとは逆に「生涯家計支持者」は、自分の介護を「配偶者だけでなく子どもにも頼りたい、しかし専門家には頼りたくない」と考える人々であり、しかも公的年金の成熟を背景に、退職後も維持される自分の家計支持力と交換にそれが可能だと考える人々である。また「公的支援忌避者」も、自分の介護を「配偶者だけでなく子どもにも頼りたい、しかし専門家には頼りたくない」と考えているが、「生涯家計支持者」とは異なって退職後の経済力について不安があるため、子どもに頼るという希望の実現可能性について楽観的ではいられない人々である。最後に「看取りあう夫婦」は、自分の介護を「まずは配偶者に頼りたいが、自分のほうが残された場合は、子どもより専門家に頼りたい」と考える人々である。

これら４タイプの世代関係のイメージは、公共領域／家内領域のイメージとも密接に関連している。「生涯家計支持者」と「公的支援忌避者」は、公共領域では専門家によるサービスに頼らず「自立」することを重視し、一方、家内領域では家族による介護に「依存」するというイメージで公共領域／家内領域をとらえている。このようなとらえ方は、近代の支配的社会認識にそったものである。この支配的社会認識を可能にするためには、家内領域でケア役割を担うケアラーが必要である。ケアラーの社会認識を示しているのが「生涯ケアラー」であり、支配的社会認識とは逆に、家内領域では家族に迷惑をかけないよう「自立」し、そのかわりに公共領域での専門家による介護に「依存」するというイメージで両領域をとらえている。

それでは「生涯ケアラー」の社会認識は、「公共領域＝自立、家内領域＝依存」という支配的社会認識を否定するオルタナティブな意識といえるのか。「生涯ケアラー」は支配的社会認識を否定しているわけではなく、夫や子どもについてはそれに従った生活ができるよう（つまり家内領域で安心して家族に「依存」できるよう）それを積極的に支持している。しかしそれゆえに、家内領域でケアラーとしての役割をもつ彼女ら自身は、それとは逆の「家内領域＝自立、そのために公共領域＝依存」という社会認識をもっているのである。最後に「看取りあう夫婦」の社会認識は、家内領域で「依存」し、それができなくなれば公共領域においても専門家に「依存」するというものである。つまり「看取りあう夫婦」の社会認識は、公共領域と家内領域が二分法的にとらえられてはおらず、「依存」が家内領域でも公共領域でも起こりうることを普通のこととして認めている。

それでは「生涯家計支持者」と「生涯ケアラー」の社会認識は今後どうなっていくのか。介護を家族だけに頼る（生涯家計支持者）、あるいは専門家だけに頼る（生涯ケアラー）というやり方をすべての人に適用することは現実的ではないし、多くの人はそれを望んでもいない。また「生涯家計支持者」と「生涯ケアラー」が考える介護のあり方はジェンダーによって二分化された介護であり、これはジェンダーの平等という点からも望ましくない。さらにこの社会認識の背後にあるのは、「自立」をノーマルな状態とする人間像である。しかしながら実際には「依存」も人間にとってノー

マルな状態である。

それでは我々が求めるオルタナティブな介護のあり方、社会のあり方とはどのようなものか。本研究では、「看取りあう夫婦」の考えを参考に、次のようなあり方を提案した。それは、家族（配偶者だけでなく子どもも含む）やその他の親密な人々が、専門家による公的サービスの援助を十分に受けつつ、また職業など他の社会的活動と両立しつつ、介護に携わるというものである。これを「ケアしあう人々」の社会認識と呼ぼう。「ケアしあう人々」の社会認識が前提とするのは、人間にとって「依存」は通常の状態であり、「依存」が必要な人をケアすることも人間にとってノーマルな状態であるという人間像である。このような介護のあり方や社会認識を実現するためには、公的介護サービスの充実に加えて、介護と職業を両立できるように働き方を見直すことが必要である。　以上。

論文審査の結果の要旨

本論文は、高齢者の介護の意識を詳細に検討することによって、公共領域と家内領域に関する社会認識の変化を論じ、夫婦や家族でケアしあう社会のあり方とそこでの望ましい社会認識を考えるという意欲的な論文である。

1973年には60歳以上でほとんどいなかった介護を家族外の専門家に頼るという人は、この10年では女性で約３割であり、男性より１割程度多い。特に女性が、子どもや嫁に頼らず専門的サービスに頼るというこの変化、すなわち世代関係の再構築はなぜ起こったのかという問題をミクロな女性の意識の面とマクロな公的年金制度の２つの側面から検討していく。

世論調査の結果の検討により、女性は自分が家族に介護されるのを避けるために専門家に頼るのであって、自分が家族を介護するのを避けようとしているのではないことが明らかになる。また、性別役割分業意識の質問紙調査の結果から家庭でのケアは女性の役割であるという意識を抽出し、ケア役割意識は男女平等意識に反するのではなく、現代でも広く女性が持つ意識であり、またこのケア役割意識が、女性が家族によって介護されるのを避けようとする意識の背後にあるとする。

このケア意識によって女性は家庭でのケアを担当してきたが、かつては年老いたときには男女とも嫁に介護を頼っていた。しかし、1980年代になって、公的年金制度が成熟し、年金が老後の生活を支え、経済的に息子に依存しなくなった。そこで年金によって老後も経済力を持った男性が、「生涯家計支持者」として誕生し、女性は嫁に介護を頼らない「生涯ケアラー」となって、90年代には専門家による介護を利用したいという意識が、男女を問わず多数となったのである。

また、インタビュー調査の結果から老後の世代関係について人々が持つイメージを検討する。公共領域では専門家によるサービスに頼らず「自立」することを重視し、一方、家内領域では家族による介護に「依存」するという近代の支配的な社会認識を持つ「生涯家計支持者」や「公的支援忌避者」を支えるためには、家内領域で「自立」しているケアラーが必要であり、そういう「生涯ケアラー」は公共：依存／家内：自立というイメージで公共／家内をとらえている。これは支配的社会認識とは反するが、支配的社会認識を否定するオルタナティブではなく、支配的社会認識に従った社会のあり方を可能にするために、女性が持たざるを得ない従属的な社会認識であると論じ、家内領域でも公的領域でもお互いに助け合い、依存しあう「看取りあう夫婦」の社会認識が家内領域と公的領域のつながりを乗り越える新たな社会認識の兆しといえると論じている。

「看取りあう夫婦」をさらに拡張し、「依存」を普通の状態であると認め、親子でも夫婦でも専門家にでも依存し、人々がケアしあうという社会のあり方、すなわち男女ともが所得を稼ぎ、ケアをしあう、つまり働き方を見直し、「自立」のみを第一とする人間像を見直す社会を目指すことが今後の社会として望ましいと結ばれている。

本論文においては、従来、別々に論じられることが多かった身体的ケアと経済的扶養を結びつけて世代関係の再構築を論じている点、公共領域と家内領域の二元論という近代の支配的社会認識を乗り越える考え方をケアの意識から導き出している点が特に優れている。

以上から、本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定する。